

## 序 章

### 0.1 研究目的

本研究は、日本語と中国語の因果関係を表す複文における接続表現<sup>1)</sup>（日本語の接続表現または中国語の“关联词语”<sup>2)</sup>）について、対照研究の立場から、いくつかの視点に着目し考察を行うものである。日本語の因果関係を表す複文においては、接続表現が必須の成分になっているのに対して、中国語の因果関係を表す複文においては、接続表現を使用する場合と使用しない場合がある。

- |                          |      |
|--------------------------|------|
| (1) 吾輩は日本の猫だから無論日本最負である。 | 『吾』  |
| 在下是只日本猫儿，所以多少也有些爱国心。     | 《我②》 |
| (2) 私はあまりおそろしくて、がたがた震えた。 | 『斜』  |
| 我听了觉得很可怕，浑身嗦嗦发抖。         | 《斜》  |

中国語では、(2)の訳文のように、接続表現が使用されていないケースが極めて多い。しかしながら、このような現象を単なる一言語の特徴と断定するには説得力に欠ける。中国語の因果関係を表す複文においては、接続表現を使用したり、省略したりする場合もあるため、接続表現の使用は自由度が高い。しかしながら、因果関係を表す表現を使用しない場合、その理由は他にもある。そもそも因果関係を表す複文に関する認識が日本語と異なっているのではないかと筆者は考える。つまり、日本語では因果関係を表す複文として扱うが、中国語では因果関係を表す複文として扱えないといったずれが存在しているということである。

また、接続表現の機能との関係もあると思われる。日本語では、節と節をつないでいく時には、接続助詞を用いるが、文と文をつないでいく場合は、接続詞を用いる。これに対して、中国語では節と節をつなぐものと、節レベルを越えた文と文をつなぐものとがほとんど同じであるため、因果関係を表すものはロジック性や説明性が強い。このような特徴があるため、場合によっては、接続表現を用いず、“意合法”<sup>3)</sup>によって前後節の意味関係が表現されるため、接続表現が省略される要因のひとつとなっている。

そこで本研究では、日本語の接続表現と中国語の接続表現の機能および使用範囲の異同について検討する。また、因果関係を表す複文における接続表現の使用については、テンス、主語、焦点などとの関わり方についても、意味論的または統語論的に幅広く、より深く考察を行いたい。それによって、両言語の因果関係を表す複文における類似点、相違点を明確にしていくとともに、両言語の因果関係を表す複文の体系やメカニズムを浮き彫りにする。

## 0.2 因果関係を表す接続表現における日中対照研究の意義

日本語の因果関係を表す接続表現の中で、最も代表的なものとしては、「から・ので」が挙げられるが、「ため(に)」「て」もしばしば見られる。これらの意味機能については多くの先行研究で既に詳述されているが、他言語との対照研究についての記述は極めて少ない。いままでの研究では、これらの使い分けや相違点、使用の制約の異同に注目して記述されているものが多く、各接続表現の意味機能に関しても、十分論じられているように思われる。

しかしながら、先行研究における記述は、日本語自体の特徴によって判断しているため、見えてこない部分の存在もまだあると思われる。他言語と比較すれば、日本語の因果関係を表す接続表現の機能などを再認識でき、接続表現の使い分けや特異性も一層明らかになると考えられる。

日本語では、接続表現の使用は構文要素の制約をほとんど受けないものと、構文要素の制約を受けやすいもののいずれもあり、それらを用いる際に、様々な構文要素との関わりを考慮しなければならない。因果関係を明示する機能を持つ「から・ので」を使用する場合、語用論的かつニュアンス的な違いはあるが、両者のいずれも、主語、述語の性質、テンスならびにモダリティ形式の制約を受けにくい。しかし、因果関係を明示する機能を持つ「ため(に)」はテンス、文末モダリティ形式の制約を受ける場合があり、他の構文要素との融合性を考慮しなければならない。

(3) 自動車を買うために、借金をした。

(3') 自動車を買ったために、借金をした。

(3)の従属節の述語動詞は意志動詞で、テンスの形式はル形であるため、「ため(に)」は原因・理由を表しておらず、目的を表している。原因を表す場合は、(3')のように、従属節の意志動詞のテンスがタ形でなければならない。

また、「ため(に)」は文末のモダリティ形式の制約を受けやすく、「から・ので」のように、発言・態度の根拠を表せない。たとえば、次の(4')のような構文は自然ではない。本論文では、用例を取り上げる際に、用例前頭に「\*」が置かれる場合、因果関係を表す複文として自然さに欠けるか、または成立できないことを示す。

(4) 時間がないので／から、急いでください。

(4') \* 時間がないため(に)、急いでください。

基本的に事柄の継起関係を表し、因果関係を明示する機能を持たない「て」も「ため(に)」と同様に、モダリティ形式の制約を受けやすい。「て」はテンスを持たず、テンスの制約を受けないが、主語、述語の制約を受ける場合がある。

① 従属節と主節の主語が同一である場合、原因・理由を表す「て」は成立するケースと成立しないケースの両方がある。

(5) 働きすぎ<sup>て</sup>倒れた。

(6) \* 母から大金を借り<sup>て</sup>、高級マンションを購入した。

(5)は従属節と主節の表現内容が直接結びついており、従属節の述語は状態を表すもので、意志性を帯びないため、原因・理由を表す「て」の使用条件を満たしている。一方、(6)は従属節の述語が意志動詞であるため、「て」で原因・理由を表せなくなり、継起関係を表すことになる。

② 従属節と主節の主語が異主語である場合、原因・理由を表す「て」は成立しない場合と成立する場合がある。

(7) 景気が悪くて、会社が倒産した。

(条件表現)

(8) \*見知らぬ男が後をつけてき<sup>て</sup>、私は一目散で逃げた。 (条件表現)

(7)の従属節と主節の主語は同一ではないが、「て」を使用できるのは、従属節の主語が非情物で、文の視点が一つしかないからである。(8)が非文になるのは、従属節と主節の主語がそれぞれ有情物であり、文の視点が統一されていないからである。

このように、日本語の接続表現は、様々な制約を受け、決して簡単に使いこなせるものではないと言える。

一方、中国語においては、接続機能を果たす成分(接続表現)の使用が極めて自由であることは周知の通りである。多くの場合、一つの複文には4種類の接続形式の使用が許される。

(9) 她们的住房并没有兵进去, <sup>所以</sup>东西一点也没有损失。 《家》

彼女たちの部屋には兵隊はいらなかった<sup>から</sup>、品物には別条はない。 『家』

例(9)の主節に結果を表す表現の“所以”が使用され、“P, 所以Q”という接続形式になっているが、次のような接続形式の使用も許容される。

(9') <sup>因为</sup>她们的住房并没有兵进去, 东西一点也没有损失。

(9'') <sup>因为</sup>她们的住房并没有兵进去, <sup>所以</sup>东西一点也没有损失。

(9''') 她们的住房并没有兵进去, 东西一点也没有损失。

(9') (9'') (9''')は、接続形式がそれぞれ“因为P, Q” “因为P, 所以Q” “P, Q”になっている。中国語としては、接続形式によって、前後節の関係が明示されている度合いが変わってくるが、日本語に訳す場合、同じ訳が得られる。(9)では、結果を表す“所以”のみを用い、結果を明示することによって、前後節の意味関係が明らかになる。(9')では、原因を表す“因为”のみを用い、原因を明示することによって、前後節の関係が明らかになる。(9'')では、従属節と主節にそれぞれ原因、結果を表す表現が用いられることによって、前後節の意味関係がいつそう明確になる。

しかし、(9''')の場合は、前後節の意味関係は、原因または結果を表すものによって表すのではなく、前後節の表現内容から意味関係を読み取る。これは、いわゆる中国語の“意

合法”である。(9’”)のようなものは、意味関係を表すものを使用しないだけでなく、前後節をつなぐ機能を持つものがなくても成立する。このような特徴は、日本語においてもあるようである。動詞の連用形を用いる文の場合、動詞の連用形には因果関係を表す機能が薄く、前後節の意味関係は前後節の表現内容から読み取るのが特徴である。

(10) 急用があり、早めに帰らせてもらった。

しかし、(10)の動詞連用形の「り」には因果関係を明確に示す機能は持たないが、接続機能を果たしていないわけではない。日本語では、複文レベルにおいては、“意合法”に相当する表現形式は存在していないと言える。

このように、因果関係を表す複文における両言語の接続表現の機能や意味用法には、相違点が多く存在していることが予想される。しかし、両言語においてはどのような相違点があるか、またはどのような類似点があるか、なぜそのような相違点または類似点があるかについては、まだ予想段階にあるものが多い。本研究で、因果関係を表す複文における両言語の接続表現に関して、それぞれの機能について多角的に検討し考察することによって、因果関係を表す複文における両言語の接続表現の機能的な異同や構文上の異同等を明らかにする成果が得られるだろう。また、両言語の因果関係を表す複文における認識的な相違を究明することによって、両言語の因果関係を表す複文の体系的な違いも浮き彫りになるであろう。

### 0.3 本研究の課題

前節で述べたように、日本語の因果関係を表す接続表現は様々な文要素と深く関わりがあり、テンスや文末のモダリティ形式などの制約を受ける場合があるが、中国語で接続表現を使用する時にそういった制約を受けるケースがあるか否かについてはまだ明らかになっていない。いままで、両言語において因果関係を表す複文に関する研究をよく目にするのが、対照研究の観点から書かれたものは極めて少ない。本研究では、両者が一体どのような類似点を持つか、またはどのような相違点をもつかについて解明するため、以下の6つの課題について、検討を行うことにする。

### 【課題Ⅰ】

日本語では因果関係を明示するものと、明示しないものがあり、同じ表現類型においても、接続表現が因果関係を明示する機能を持つものか、それとも明示する機能を持たないものかによって、表される因果関係の度合いが違って来る。また、同じ接続表現を使用しても、原因節を強調する要素が使用されている文は、使用されていない文より、前後節の因果関係の度合いが高い。さらに前後節の位置を変えることによって、因果関係の度合いも増すことになるかと推測される。

一方、中国語は語順によって文を構成していくため、形式に拘らず、接続形式の類型はバラエティに富んでおり、一文にひとつ、またはふたつ以上の接続表現を使用するケースがあるだけでなく、接続表現が使用されないこともある。そのうえ、強調要素の使用も単一ではなく、多様化されている。したがって、中国語では接続形式の表現類型と因果関係の度合いとの関わりについて判断する場合、接続表現の機能や構文の順序、強調要素によって判断する手段も使用されているが、強調要素または接続表現の数が、前後節の因果関係の度合いと深く関わっている。このように、両言語において、それぞれ接続形式の表現類型が因果関係の度合いと関わっていることが予想されるため、これらについて究明する。

### 【課題Ⅱ】

日本語の因果関係を表す接続表現は様々な原因・理由を表し、機能が広い。一方、中国語の因果関係を表す接続表現は機能が狭く、ひとつの接続表現によって、多様な原因・理由を表しきれず、接続表現の使用は前後節の表現内容によって変わってくる傾向がある。また、日本語の接続表現の使用は、文の性質の制約を受けにくく、広範囲に使われているが、中国語は文の性質によっては接続表現の使用を避ける傾向もあり、接続表現の使用範囲は日本語より狭い。つまり、日本語では、原因・理由を表す複文として認められているが、中国語ではそう認められていないものもあるのではないかと考えられる。このように、両言語の接続表現の機能的な異同または原因・理由を表す複文の枠組み上の相違について究明することが求められる。

### 【課題Ⅲ】

日本語の因果関係を表す複文では、原因・理由節が焦点化される場合、接続表現は文末

の「のだ」と共起し、「P (から・ので・ため(に)・て)、Qのだ」という構文手段によって、焦点 (focus) が際立たせられるのが特徴的である。一方、中国語の因果関係を表す複文では、焦点の表現形式は構文手段の“是……的”によるものだけではなく、語彙による表現形式も多くある。また、形態を重視する日本語と形態的標識に乏しい中国語とでは、焦点の位置が同じであっても、焦点のマーカーの位置ではずれが生じてくることが予想される。このように、因果関係を表す複文における両言語の焦点化の表現形式および焦点接続表現の位置の類似性と相違性についての検討も必要とされる。

#### 【課題Ⅳ】

日本語の因果関係を表す複文では、接続表現を用いる際に、主語の制約や従属節の動詞の意志性の有無と関わってくる場合があるが、中国語はどうであろうか。中国語では、接続表現の使用は、前後節の主語が同一であるか否か、非情物か有情物かに拘泥しているのではなく、主語の位置の制約を受けやすいと考えられる。中国語では、接続表現を用いる場合、3つの表現類型がある。ここで接続表現をG、従属節をP、主節をQとすると、次のようになる。

- ①  $\boxed{G}P, \boxed{G}Q$       ②  $\boxed{G}P, Q$       ③  $P, \boxed{G}Q$

接続表現の位置は主語と同じであるため、主語が先頭に立つかそれとも接続表現が先頭に立つかは、接続表現の機能によって、異なっている場合がある。述語動詞と接続表現の関わり方に関しては、中国語の因果関係を表す複文は、「動的因果関係」と「静的因果関係」の2種類に分けられる。「動的因果関係」を表す接続表現の使用範囲は狭く、主節の述語動詞が動作性を持たなければ、使用されにくいことも考えられる。

上記の仮説を検証するため、日本語の接続表現と中国語の接続表現の使用が主語、述語動詞とどのように関わっているかについて検討することが求められる。

#### 【課題Ⅴ】

日本語の因果関係を表す複文においては、接続表現の使用はテンスの制約を受けるケースがあるが、語形変化を持たず、テンスの体系がまだ完全に確認されていない中国語では、日本語とはまったく異なった制約を受けるようである。中国語では、因果関係を表す複文の基本的な成立条件は、前後節のアスペクトが“P已然、Q已然”となることだと言われているが、実際には“P已然、Q未然”“P未然、Q已然”“P未然、Q未然”も存在する。

この点に関して、邢福義(2001)<sup>4)</sup>では以下のように述べられている。

「因果式」は一般的には已然の「因果関係」を表すが、原因と結果はすべて已然表現であるとは限らない。次の3種類の場合がある。

- ・「原因」は已然であるが、結果は未然である。
- ・「原因」は未然であるが、結果は已然である。
- ・「原因」は未然であり、結果も未然である。

しかし、中国語の接続表現は事実に基づいた因果関係を述べるのが特徴であるため、主節が未然のアスペクトである場合、制約を受けるものがあると考えられる。このように、因果関係を表す複文における日本語の接続表現と、中国語の接続表現の使用は、それぞれ異なった時間表現の制約を受けることが想定される。こういった仮説を検証するため、日本語の接続表現と中国語の接続表現が、それぞれ時間表現とどのように関わっているかについて検討を行うべきである。

#### 【課題VI】

日本語は、節と節をつなぐうえで、接続表現の助けを借りなければならないため、構文上は形態を重視し様々な制約を受けやすい。したがって、複文の成立は、「原因→結果」、または「結果←原因」といった前件と後件の関係に拘らなければならない、バラエティに富んだ構文の成り立ちは許されない。

一方、中国語では複文の成立は接続表現に左右されず、構文制約を受けにくく、原因節と結果節の位置変換が自由であるため、因果関係を表す複文の構文モデルは「原因→結果」、または「結果←原因」といった典型的な構文形式だけではなく、「 $P_1 \rightarrow Q \leftarrow P_2$  (原因→結果←原因)」のように、「 $P_1$ 」は「 $Q$ 」を引き起こす原因であり、「 $P_2$ 」は「 $Q$ 」という結果が生じた原因をさらに補足し説明するといった「変形型」の存在も認められると想定される。

上記の仮説を検証するためには、両言語の因果関係を表す複文の構文モデルについてそれぞれ分類し、構文の特徴について検討した上で、そのような特徴を生む理由について探求することも必要である。

#### 0.4 日本語教育における因果関係を表す接続表現の日中対照研究の意義

因果関係を表す複文では、両言語の接続表現の意味用法や機能、表現形式が異なっている点が多く、中国語母語話者の日本語学習者にとっては、使いこなすのが決して容易ではないと言える。

本研究は、因果関係を表す複文における接続表現の表現類型、接続表現の機能および使用範囲、接続表現と構文要素との関わり、接続表現の機能と文の展開との関わりといった面に注目し、7つの課題を設定し対照研究を行うものである。この研究を通して、日本語教育において、少なくとも以下のような意義があると考えられる。

##### 0.4.1 接続表現の類型と因果関係の度合いとの関連性への理解

日本語は、形態に拘泥しており、因果関係を表す複文における接続表現の表現類型はそれほど複雑ではない。ここで接続表現を「C」で示すと、以下の2種類の表現類型が考えられる。

- |             |                          |
|-------------|--------------------------|
| ① 「PC、Q」型   | 例： P {から・ので・ため (に) ・て}、Q |
| ② 「Qのは、PC」型 | 例： Qのは、P (から・ため) だ       |

「PC、Q」型がもっとも多く見られる表現類型であるが、「Qのは、PCだ」のように、構文順序を変えるものもある。

一方、中国語は0.2で述べたように、接続形式の使用は形式に拘らず、自由であるため、表現類型はバラエティに富んでいると考えられる。ここで中国語の接続表現を「G」で示すと、考えられる表現類型は以下の5つの類型である。

- |           |               |
|-----------|---------------|
| ① “GP、Q”  | 例：“因为P，Q”     |
| ② “P，GQ”  | 例：“P，所以Q”     |
| ③ “GP，GQ” | 例：“因为P，所以Q”   |
| ④ “P，Q”   | 例：“P，Q” (意合法) |
| ⑤ “GQ，GP” | 例：“之所以Q，是因为P” |

以上の5つの表現類型は中国語では基本的な表現類型であるが、実際に使用される接続表現の数や接続表現の機能、構文順序によって前後節の因果関係の度合いが異なっている。中国語の接続表現の使用の自由度という点から考えると、前後節の因果関係の度合いを強めようとするれば、接続表現の数を増やせば、そういった効果が生み出せる。それによって、接続表現の表現類型の種類もさらに増えていくということも推測される。

しかし、それぞれの言語において、因果関係の度合いは接続類型と一体どのように関わっているか、また因果関係の度合いによって、両言語の対応関係にはどのような相違点と類似点があるかということは、まだ未知の段階にある。それらについて検討し、明らかにすることによって、中国語母語話者の日本語学習者が日本語の因果関係を表す接続表現を学習する際に、接続表現の機能、表現類型と因果関係の度合いとの関わりへの理解を深め、従属節と主節の意味関係をより適切に表現できるようになるだろう。

#### 0.4.2 接続表現の機能および因果関係を表す複文への認識

日本語では、「から・ので」のような接続表現は、様々な原因・理由文の中で使用されているが、中国語では、因果関係を表す複文におけるもっとも代表的な接続表現の“因为”“所以”は、論理的かつ説明的であるため、原因・理由の性質によって使用できない場合が多くある。たとえば、

- (11) 仕方がないから主人からとうとう表向に聞き出した。 『吾』  
没办法，主人只好公开问 『我①』

(11)の場合は、前件の「仕方がない」という表現内容から、動作主の心理的色彩を帯びていることが窺える。このような心理的色彩を帯びるものを中国語に訳す場合、“因为”“所以”を使用すると、前後節の意味関係を論理的かつ説明的なニュアンスが強く前面に出され、原文にあるニュアンスを的確に伝えることができない。中国語では、前後節の表現内容の意味合いを正確に伝えようとする、前後節の表現内容によって、接続表現の使用を変えることが求められる。しかし、多くの中国語母語話者の日本語学習者は、そういったことに気づかず、日本語の因果関係を表す接続表現は中国語の“因为”“所以”に相当すると思込んでいるのが現状である。つまり、日本語の因果関係を表す接続表現の機能につ

いてまだ十分理解していないと言える。

また、日本語では、接続表現の使用は、文の性質の制約を受けにくく、広範に使われているが、中国語は文の性質によって、接続表現の使用を避ける傾向があり、接続表現の使用範囲は日本語より狭いと考えられる。また、日本語では、原因・理由を表す複文として認められているが、中国語ではそう認められていないものもある。両言語にそのようなずれが存在しているため、中国語母語話者の日本語学習者は、日本語の因果関係を表す複文に関して、認識しにくい部分がある。この研究を通して、両言語の接続表現の機能ならびに接続表現の使用範囲を見極め、両言語の因果関係を表す複文の枠組みを明らかにすることによって、中国語母語話者の日本語学習者に日本語の因果関係を表す接続表現の機能を正確に理解させるのに役に立つだけでなく、日本語の因果関係を表す複文に関する認識も再確認することも期待できるだろう。

#### 0.4.3 接続表現の使用と構文要素との関わりへの理解

日本語では、原因節を焦点化させる場合、接続表現を文末の「のだ」と共起させ、「Pから、Qのだ」のような構文形式がある。中国語母語話者の日本語学習者にとっては、文末の「のだ」をつけることによって、原因節が焦点化されるということについて理解することは決して容易ではない。「から・ので・ため（に）・て」と文末の「のだ」と共起して、どのような表現効果があるかについては、正確に理解できている学習者は少ないと予測できる。日本語と中国語の原因節の焦点化の表現形式を明らかにし、原因節の焦点化における両言語の対応関係を明確にすることによって、中国語母語話者の日本語学習者に日本語の原因節の焦点化ならびに原因節の焦点化の用法に関して、正確に理解してもらうことが望めるだろう。

また、日本語の接続表現の使用は主語、述語動詞やテンスの制約を受ける場合があり、0.2で述べたように、特に「ため（に）・て」の場合、構文要素の制約を受けやすい。

一方、中国語は、接続表現の使用がテンスの制約を受けることはまずない。というのは、中国語はテンスを持たないからである。また、主語や述語動詞の制約を受けるか否かについては、まだ明らかにされていないので、断言できないが、接続表現と構文要素との関わりには、両言語のずれが多くあると予想される。

したがって、日中両言語の因果関係を表す複文における接続表現の使用と構文要素との

関わりを明らかにする必要がある。中国語母語話者の日本語学習者にとって接続表現の使用と構文要素との関わりを理解することにより、効果的な学習を期待できるだろう。

#### 0.4.4 接続表現の機能と原因節の展開との関係

日本語では、原因・理由節が複数である場合は、各原因節にそれぞれ接続表現が使用されているが、原因節を展開していく際、接続表現の機能によって、制約を受ける場合がある。原因・理由節が複数であれば、因果関係を明示する機能を持ち、構文要素の制約を受けにくい「から・ので」節は、「て・ため」節を包含するのが一般的である。

(12) 風が強<sup>て</sup>く、雨も激しい<sup>ので</sup>、外出しなかった。

(13) 電車が遅れた<sup>ため</sup>、遅刻した<sup>ので</sup>、試験に参加できなかった。

(12)(13)の「て」節と「ため」節はそれぞれ「ので」節に包含されており、極自然の文になっているが、「て」「ため」を「ので」と置き換えると、自然さを失ってしまう。

(12') \* 風が強<sup>い</sup>ので、雨も激しくて、外出しなかった。

(13') \* 電車が遅れたので、遅刻したため、試験に参加できなかった。

日本語では、原因・理由節が重なっていく場合、接続表現の機能によって、(12')(13')のような制約を受けるケースがあるが、すべてそういった制約を受けるとは限らないと考えられる。どんな場合に制約を受けるか、または受けないかについては、さらに検討する必要があると思う。

一方、中国語では接続表現が省略されたりする場合が多くあるため、原因節が複数であっても、各原因節にそれぞれ接続表現を省略するケースと、各原因節にそれぞれ接続表現を使用するケースと文頭のみ接続表現を使用するケースのいずれもある。たとえば、原因節が複数の場合、接続表現の使用は以下の3種類の表現類型が考えられる。中国語の接続表現を「G」で示す。

“G P<sub>1</sub>、G P<sub>2</sub>、……”、“P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、……”、“G P<sub>1</sub>、P<sub>2</sub>、……”

中国語では、接続表現が使用される際、その位置は日本語とは異なっており、各節の前頭か、文の前頭に置かれている。このように、中国語は構文上において、接続表現の使用が日本語とは異なる制約を受けることが十分考えられる。また、中国語は接続表現の使用は自由度が高いため、構文上の自由性や多様性の存在も考えられる。

この研究では、日中両言語の因果関係を表す複文の各構文モデルにおける接続表現の使用と接続表現の機能について検討し、それぞれの特徴を明らかにすることによって、中国語母語話者の日本語学習者にとっては、より複雑な因果関係を表す複文を構成していく際の難点と留意点が表面化される。構文上における両言語の接続表現の使用の相違点を把握することによって、中国語母語話者の日本語学習者は日本語の接続表現の機能、意味用法に対する理解を深めると同時に、より複雑な構文も使いこなせるようになることも期待できるだろう。

## 0.5 研究対象

### 0.5.1 日本語の場合

日本語では、原因、理由を表す表現が多くある。「から・ので」をはじめ、様々な表現が原因・理由を表す。たとえば、取立て助詞を含む形式として「からこそ・から(に)は・だけに・だけあって」、形式的な名詞を含む形式として「もので・せいで・おかげで・ばかりに・ために・あまりに・ゆえに・こととて」、その他「以上(は)・上は・結果・手前」のような形式も原因・理由を表すことができる。日本語には多様な因果関係を表す表現があるが、本研究は、その中で、「から・ので・ため(に)・て」を含むものを研究対象<sup>5)</sup>としたい。これらを研究対象とする理由は、「から・ので・ため(に)・て」の意味、機能が多様で、使い方も複雑であると考えたからである。また、因果関係を表す形式としては、最も多用されている表現であるため、日本語の原因・理由を表す複文にある特徴的なものが「から・ので・ため(に)・て」を用いる文において、ほとんど現れていると考えたからである。なお、「から・ので・ため(に)・て」は、多様な機能を持つが、本研究は因果関係を表す接続表現に関する研究であるため、扱うものは因果関係を表すもののみである。以下、本研究で研究対象とするものをまとめて、【表1】に提示する。

【表1】本研究で扱う日本語の接続表現

項目	用法
から	① 単なる原因、理由を表すもの（「ので」に言い換えることができる）
	② モダリティ形式と共起するもの
	③ 結果や帰結を先に述べ、原因・根拠・理由などを後から説明的に述べるもの（～のは、～からだ）
ので	① 単なる原因・理由を表すもの（「から」に言い換えることができる）
	② モダリティ形式と共起するもの
ため（に）	原因・理由を表すもの(倒置文を含む)
て	原因・理由を表すもの

## 0.5.2 中国語の場合

本研究では、中国語が原文である用例を採集する場合、いままでの日中対訳文で観察された「から・ので・ため・て」と対応する表現を含むものを対象とする。中国語の接続表現の使用は、前後節の表現内容の制約を受ける特徴があるという点を考慮して、研究対象範囲を次のように規定する。

単なる因果関係を表すもの、継起関係を伴う因果関係を表すもの、因果関係は表せないが、前後節の時間的な継起関係を表し、接続機能を持つものの三種類の接続表現を研究対象とする。また、中国語では、接続表現を使用しないものもあるため、“P, Q”表現形式のものも研究対象<sup>6)</sup>とする。具体的表現は【表2】に示す。

【表2】中国語の研究対象範囲

分類	表現
因果関係を表すもの	因为, 所以, 由于, 因此, 因而, 只好, 只得
継起関係を伴う因果関係を表すもの	于是
前後節の時間的な継起関係を表すもの	就, 便, 才
“关联词语”を使用しないもの	P, Q

注1: P=従属節、Q=主節

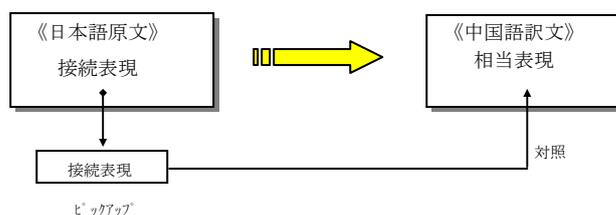
注2: 以上の表現を含むものを研究対象とする。例えば: 因为(是因为)、所以(之所以)、由于(是由于)なども含まれる。

## 0.6 調査資料および調査分析方法

調査資料は、「日中対訳コーパス」および筆者によるデータベース、「北京大学汉语语言学研究センター語料庫」を用いる。なお日本語原文は、ひとつの原文に対して、複数の訳本を

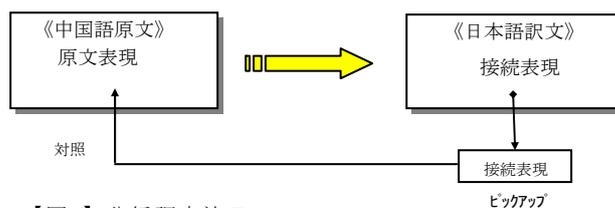
持つものもある。調査分析方法としては、上記の調査資料から研究対象に該当する用例を抽出し、傾向を観察する。「日中対訳コーパス」と、筆者によるデータベースを原文と訳文ともに提示する。なお、「北京大学汉语语言学研究中心语料库」による用例は、中国語のみであるので、使用される際、筆者による訳文を付ける。

データを収集する際、両言語の間に潜む問題点を見出すため、まず対訳上の傾向をつかみ、【図1】のような調査分析方法を用いる。



【図1】 分析調査法 I

【図1】のような調査分析方法を通して観察された傾向をさらに裏付けるため、中国語の原文と日本語の対訳用例を収集する。なお、中国語が原文である用例を調査する際には、2種類の調査方法を用いる。一つ目は、日本語訳文から日本語の因果関係を表す接続表現を含むものを抽出する方法である。そして原文を辿り、それらがどのような表現から翻訳されたかについて観察する。いままでの日中対照研究では、このような方法論を用いるものは極めて少ないが、中国語には接続表現が省略される傾向が強いということを考慮すると、この方法をとれば、中国語が日本語に訳される際に、両言語が等価になっている部分だけでなく、等価になっていない部分も認識できるはずである。つまり、日本語の因果関係を表す接続表現に翻訳されたものには、「有標」<sup>7)</sup>と「無標」<sup>8)</sup>の2種類が観察されるということである。また、この調査分析方法によって得られた結果は、最初の調査結果に対するさらなる裏づけにもなる。これを図で示すと以下のようなになる。



【図2】 分析調査法 II

もうひとつの方法は、まず日本語原文と中国語の対訳を観察し、日本語の因果関係を表す接続表現と対応性が高い接続表現を把握するものである。そして、中国語が原文である用例を抽出する際に、それらを含むものを収集対象とする。日本語の対訳文から中国語の特徴を見るのではなく、原文から中国語の特徴をつかむ。この調査分析方法を用いる狙いは、中国語の因果関係を表す複文の特徴を客観的にとらえることである。

なお、本研究で扱う資料は、対訳文を持つものだけではなく、各言語のみのものも扱う。この場合、日本語は「青空文庫」で公開された文学作品を用い、中国語は「北京大学汉语语言学研究中心语料库」を用いる。

上記の調査分析方法は、すべて本論の準備段階の手続きである。このような手続きを通して、両言語の因果関係を表す接続表現に潜んでいる根本的な問題点を洗い出し、それに基づいて本論の課題を提起する。本論文の研究方法については、主に以下のような方法を用いる。

両言語の特徴を客観的にとらえるため、まずそれぞれの原文に着目して、各自の特徴について検討を行う。そして分析結果によって、両言語の異同について記述する。なお、本論文では、場合によって対訳例を使用し両者の対応関係を記述する部分もある。また、中国語の用例を挙げる際、訳文をすべて付加するが、この主な目的は、対応関係を見るためではなく、参考とするためである。

## 0.7 研究内容および研究方法

ここでは本論文の構成を説明する。まず第1章では、日本語の複文の分類と中国語の複文の分類について概観する。そして両言語において、因果関係を表す複文がそれぞれどのように位置づけられているかについて述べる。最後に日本語の因果関係を表す接続表現と中国語の因果関係を表す複文に関する先行研究を整理し、問題点を提示する。

第2章では、両言語の因果関係における接続表現の使用と因果関係の度合いとの関連性について論じる。

2.1節では、日本語の「から・ので・ため(に)・て」を含む用例から観察された接続形式の類型をまとめて提示する。そして、日中対訳を通して得られた「から・ので・ため(に)・て」に対応する中国語表現を一覧表にまとめ、それに基づいて中国語の接続形式の類型を分類して提示する。

2.2節では、日本語における接続形式の類型と因果関係の度合いとの関わりについて検

討する。日本語が原文であるものを用い、接続表現の機能、原因・理由を強調する要素の有無、構文順序の倒置といった点を視野に入れ考察を行う。

2.3 節では、中国語における接続形式の種類と因果関係の度合いとの関わりについて検討する。中国語が原文である用例を用い、接続表現が使用されるかどうか、使用接続表現が因果関係を表すものであるかどうか、また使用接続表現の数は単数か複数か、原因理由を強調する要素があるかないかなどと関連づけながら検討を行う。

2.4 節では、2.2 と 2.3 で得られた結果をさらに裏付けるため、因果関係の度合いによる日中両語の対応関係について観察する。

2.5 節では、2.2 と 2.3 の考察結果をまとめた上、接続表現と因果関係の度合いとの関わりにおける両言語の相違点と類似点を述べる。

第3章では、因果関係を表す接続表現の使用範囲および機能の異同について記述する。

3.1 節では、両言語の因果関係を表す複文の枠組みについて、それぞれの先行研究を踏まえながら確認した上、本章の研究枠組みを確立する。日本語の因果関係を表す複文の枠組みが大きいということを考慮し、日本語の因果関係を表す複文の分類に基づき、本章の考察の進め方を決める。

3.2 節では、日本語におけるモダリティ要素が含まれない「単なる原因・理由を表す文」を8種類に細分類し、それぞれ中国語との比較対照を行う。基本的には、日本語について考察する場合、日本語が原文であるものを用い、中国語について考察する場合、中国語が原文であるものを用いる。しかし、日本語では因果関係を表す複文として扱えるが、中国語では因果関係を表す複文として扱えないものもあるため、場合に応じて、日中対訳例を用いるケースもある。また、筆者による作例の使用ケースもある。3.2 節では、「から・ので・ため(に)・て」はそれぞれどのような原因・理由を表す文で使用されるかについて考察し、「から・ので・ため(に)・て」の機能を明らかにする。そして、同じ特徴を持つ原因・理由文において、中国語ではどのような接続表現が使用されるかについて検討し、中国語の接続表現の機能も明確にする。

3.3 節では、「推量・判断の根拠を表す文」における比較対照を行う。まずこの種の文において、日本語の接続表現の使用が許容されない場合があるかどうかについて検討する。そして中国語についても同様の考察を行う。

3.4 節では、「発言・態度の根拠を表す文」について対照分析を行う。この種の文は、日本語では因果関係を表す複文の一種として扱うが、中国語では、因果関係を表す接続表現

の使用が許容されないため、因果関係を表すものとして扱えるかどうかについて検討する必要がある。本節では分析にあたって、日中対訳例のみを取り上げる。

3.5節では、3.2～3.4で行った比較対照を通して、両言語の接続表現の機能および使用範囲の類似性と相違性を見極める。

第4章では、因果関係を表す複文における原因節の焦点化について考察し、両言語の焦点化の表現形式および焦点マーカ―の位置の類似性と相違性を明らかにする。

4.1、4.2節では、焦点の定義や表現形式について記述する。

4.3節では、因果関係を表す複文における両言語の原因節焦点化の表現形式について述べる。

4.4節では、日中対訳例を用い、主節の「のだ」による原因節焦点化の場合と、構文の順序による原因節焦点化の場合において、両言語の対応関係について考察する。

4.5節では主節に疑問表現と推量表現が現れ、原因節が疑問のフォーカス、推量のフォーカスとなる場合の両言語の焦点の表現形式についても、実例を通して検討する。

第5章では、日中それぞれの接続表現の使用と主語および述語動詞との関わりについて論じる。日本語の因果関係を表す複文では、接続表現を用いる際に、主語の制約を受けたり、従属節の動詞の意志性の有無が関わってくる場合があるが、中国語では、接続表現の使用は、それとは異なった制約を受ける場合もある。

5.1節では、主語と述語の組み合わせについて、同一主語のものと異主語のものをそれぞれ4パターンずつ、合計8パターンを措定する。

5.2節では、同一主語による構文パターンにおいて、日本語及び中国語の接続表現の使用が、それぞれどのような制約を受けるかについて検討する。用例を取り上げる際、基本的には日本語について検討する場合は、原文が日本語であるものを用い、中国語について検討する場合は、原文が中国語であるものを用いるが、中国語の原文から同じ構文条件のものを見出しにくい場合、日本語に対応する中国語の訳文を用いる場合もある。なお、訳文を使用する場合は、狙いとしては対応関係を見るためではなく、中国語そのものの特徴について考察するためだけである。また筆者による作例の使用ケースもある。

5.3節では、異主語による構文パターンにおいて、日本語の接続表現および中国語の接続表現の使用がそれぞれどのような制約を受けるかについて考察を行う。用例を挙げる際、5.2節と同様の方法を用いる。

5.4節では、5.2と5.3の対照分析結果を通して、前述の8パターンにおいて両言語の

接続表現使用時の制約の異同についてまとめて述べる。

第6章では、因果関係を表す複文における日本語の接続表現及び中国語の接続表現の使用と時間表現との関係について論じる。日本語の因果関係を表す接続表現の使用は、述語のテンスの制約を受ける場合がある。しかし、語形変化を持たず、テンスの体系がまだ確認されていない中国語では、接続表現の使用はテンスの制約を受けることはなく、アスペクトの制約を受ける場合があると予想される。

6.1節では、先行研究を踏まえながら、両言語がそれぞれどのような時間表現と関わっているかを確認する。

6.2節では、日本語の接続表現の使用とテンスとの関わりについて検討する。従属節と主節の述語のテンス形式によって、4パターンに分け考察を行う。接続表現の使用とテンスとの関連性を述べると同時に、各パターンにおける従属節と主節の時間関係にも注目する。

6.3節では、中国語の接続表現の使用とアスペクトとの関わりについて検証する。アスペクトの分類と表現形式について述べた上、因果関係を表す複文における従属節と主節のアスペクトの組み合わせによって、4パターンに分類する。各パターンにおける接続表現の使用について分析するだけでなく、アスペクトマーカの使用についても分析する。

6.4節では、6.2、6.3節の分析を踏まえながら、両言語の接続表現の使用と時間表現との関わり方をまとめて提示する。

第7章では、因果関係を表す複文における構文モデルについて比較対照を行う。因果関係を表す複文の基本的な構造は、順行型の「原因→結果 (P→Q)」構文と、逆行型の「結果←原因 (Q←P)」構文の2種類あるのが日本語と中国語の共通点であるが、これらの基本的な構造から発展し、文を構成していく場合、両言語にさまざまなずれが生じることが推測される。

7.1節では、日本語の構文モデルを筆者の想定した「順行型」と「逆行型」の二種類に大別した上で、原因節の構成に着目し、さらに細分類する。「順行型」構文モデルについての考察にあたっては、原因節間の関係を見るだけではなく、原因節の構成と、接続表現の機能との関わりにも注目する。「逆行型」構文モデルについて考察する際は、原因節が焦点化されることを考慮した上、各構文モデルにおける構文上の特徴と、接続表現の機能領域について検討する。

7.2節では、中国語の構文モデルを「順行型」「逆行型」「変形型」の三種類に大別して、

7.1と同様に、さらに細かく分類をする。「順行型」について検討する場合、原因節間の関係、接続表現の位置および機能領域に注目する。「逆行型」については、日本語と同様に構文順序による原因節の焦点化を考慮しながら、各構文モデルの特徴と、接続表現の機能領域に着目して考察する。「変形型」については、構文の特徴や構文の単位に注目して分析を行った上、取り上げた用例の日本語訳文を観察し、「変形型」構文モデルに対応する日本語の構文上の特徴についても記述する。

7.3節では7.1、7.2節の分析結果に基づき、各構文モデルにおける両言語の構文上の特徴、接続表現の使用上の制約などについてまとめ、対照分析一覧表を作成する。

第8章では、研究成果に基づき、中国語母語話者の日本語学習者にとっての因果関係を表す複文における習得上の問題点を指摘し、日本語教育への提案を行う。

8.1節では、中国語母語話者の日本語学習者を教授対象として、因果関係を表す接続表現に関する教授上の課題を提起する。

8.2節では、研究成果を踏まえて、中国語母語話者が日本語を学習する際、因果関係を表す接続表現の習得上の問題点を提示し、そういった難点が何に起因しているかについて分析を行う。

8.3節では、中国語母語話者が日本語を学習する際の因果関係を表す接続表現の習得上の難点を意識した上で、日本語の因果関係を表す接続表現の扱われ方の現状を知るために、日本と中国で出版された教科書、日本で出版された中国語母語話者の日本語学習者向けの解説書や教師用マニュアルなどを調査する。

8.4節では、教科書、参考資料における因果関係を表す接続表現の扱われ方の問題点を指摘する。

8.5節では、本研究の対照分析結果と、8.1～8.4までの記述を踏まえて、日本語教育への提案を試みる。

第9章では、各章の結果をまとめ、本研究の結論を述べる。

## 0.8 本研究に使用する主要用語の概念

この論文において、便宜上、多く使用される用語または両言語では呼称が統一されていないものについて定義をしておく。用語の定義に関しては、先行研究より直接引用したものもあれば、先行研究を参照して定めたものと筆者によるものもある。

### ① 接続表現

佐久間(2002)<sup>9)</sup>では、「接続表現とは、文章・談話論における接続機能を有する語句の総称であり、品詞論の接続詞、接続助詞や構文の接続語、接続句に対する概念である。」と定義している。本研究は、接続表現について広範にわたって論じるものではないが、接続機能を持つ「接続助詞」について検討するものであるため、佐久間(2002)に従い、扱う研究対象を「接続表現」と呼ぶ。また、中国語では接続機能を有するものを“关联词语”と呼ぶが、本論文を書くにあたっては便宜を図るため用語を統一し、中国語の“关联词语”も「接続表現」と呼ぶことにする。

例)

日本語：から、ので、ため(に)など

中国語：因为，所以，由于，就など

### ② 動的因果関係<sup>10)</sup>

叙述的であり、動作・行為または事物の変化を描写する文における因果関係を言う。主節で動作・行為の変化について述べるのが特徴であり、述語は一般的に動作性動詞を用いる。

例)

(14) 啓造は、徹の目が涙ぐんでいるのに気づいて、ソファから身を起こした。『氷』

(15) 因为时间还早，他们就在车站外面的一片空地上并肩漫步着。『青春』

まだ時間があるので、駐車場の外の空気を散歩した。『青春』

### ③ 静的因果関係<sup>11)</sup>

物事について判断、説明あるいは評論する文における因果関係を言う。

例)

(16) 出来のわるいものは商品としなかったから、いきおい出荷がおくれる。『越』

(17) 妈妈是个总支书记，当然会有人拍马屁。『人啊』

お母さんは総支部書記だから、おべっか言う人がいても不思議じゃない。『ああ』

④ 明示的因果関係<sup>12)</sup>

因果関係を表す機能を有する接続表現によって表された因果関係を意味する。

例)

日本語：から、ので、ため(に)

中国語：因为，所以，由于，于是など

⑤ 非明示的因果関係<sup>13)</sup>

接続機能を持つが、因果関係を表す機能を持たないものが使用される文の因果関係を言う。つまり、従属節と主節の因果関係は接続表現によって示されるのではなく、表現内容から読み取るという意味である。例えば、日本語の「て」と中国語の“就/便”がそれに当たる。

⑥ 因果関係の度合い

接続表現の機能や構文要素などによって、従属節と主節の因果関係が明示か非明示か、または強調されたか否かといった因果関係の強弱を意味する。

⑦ 機能領域<sup>14)</sup>

接続表現の働きはどこまで関わっているかということを表している。つまり、接続表現の働きの影響を受ける範囲を意味する。

例)

(18) 因为他人品好，人又聪明，所以大家都很喜欢他。

かれは人柄がよくて、聡明なので、みんなに好かれている。

(18)の文頭に立つ原因・理由を表す“因为”の働きは、 $P_1$ の“他人品好”と $P_2$ の“人又聪明”の二つの原因節と関係している。すなわち、“因为”の機能は並列している二つの原因節の最後まで影響を与えているということである。

## 注

### 序章

- 1) 日本語の「接続表現」または中国語の“关联词语”を指す。日本語では接続機能を有するものを「接続表現」と呼び、中国語では“关联词语”と呼ぶが、本論文を書くにあたって、便宜を図るため、用語を統一し、日本語の「接続表現」と中国語の“关联词语”をともに「接続表現」と呼ぶことにする。
- 2) “关联词语”の定義については、鈴木(1992: 61)では「関連作用を行う語句のことを指す。関連詞語は主として接続詞の「但是」, 「如果」, 「然而」など、副詞「又」「才」「就」等および一部の短語が当てられる。その働きは主に複文中の前件・後件を接続し、その構造的関係を表すことである」と定義している。
- 3) 中国語の“意合法”に関しては、鈴木(1992: 61)では王力(1985)を引用し、「中国語の複文における“意合法”については中国語の複文は一種の意合法であることがよくある。西洋の言語ではパラタクシスと呼ばれる。如何なる文法成分もなく2つの文をつなぎ合わせるとき、……, 文の形式の中に「逗調」があれば、一種のパラタクシスを構成することができる。この形式では、「逗調」も結合の文法的成分の働きをする」と記述されている。
- 4) 邢福义(2001:59-60)参照。
- 5) 研究対象範囲を規定する際、主に永野(1952)、森田(1980)、白川(1991)、蓮沼(2001)、寺村(1982)南(1993)、于(2000)を参照した。
- 6) 中国語の研究対象範囲を規定する際、主に邢福义(2001)、王维贤等(1994)、王起澜(1989)、新田(2004)参照した。
- 7) 「無標」とは、中国語の複文では接続表現が用いられていないもののことを言う。
- 8) 「有標」とは、複文では節と節をつなぐ役割を果す成分が使用されているもののことを指す。
- 9) 佐久間(2002:162)参照。
- 10) 「動的因果関係」の意味については、詳しくは赵新(2003: 27)を参照されたい。
- 11) 同上。
- 12) 「明示的因果関係」に関する解釈は、蓮沼(2001: 104-148)、于(2000: 127-168)を参照したものである。
- 13) 「非明示的因果関係」に関する解釈は、蓮沼(2001: 104-148)、于(2000: 204-230)を参照したものである。
- 14) 「機能領域」という用語は佐久間(2002)によるものである。

## 第1章 先行研究および本研究の立場

本章では、日本語の因果関係を表す接続表現と中国語の因果関係を表す複文に関する先行研究に触れる前に、まず日本語の条件を表す複文の分類と中国語の“主従複文”<sup>1)</sup>の分類、つまり、両者の枠組みについて見ておきたい。そして、因果関係を表す複文の両言語における位置づけについても述べておきたい。最後に、日本語の因果関係を表す接続表現と中国語の因果関係を表す複文に関する先行研究を整理し、概観した上で、本研究の立場について述べる。

### 1.1 日本語の条件文と中国語の“主従複文”の分類

#### 1.1.1 日本語の条件文の分類

日本語では、条件を表す複文が2種類に分類されている。すなわち、確定条件文と仮定条件文である。仁田(1987)<sup>2)</sup>では条件づけを表す従属節の下位的タイプについて概観し、【表2】のように示している。

【表3】 仁田(1987)による条件複文の分類

	継起・条件づけ	順条件づけ	逆条件づけ	
事実的	スルト・シタラ	スルカラ・スルノデ	シテモ	スルノニ
仮定的		スル(シタ)ナラ・スレバ		シタッテ

仁田の分類には、単なる順条件づけ、逆条件づけだけではなく、条件づけおよび継起関係に跨がり、継起関係的にも条件づ的に使われる形式の「スルト」と「シタラ」も加えられている。また、蓮沼(2001)<sup>3)</sup>では、条件表現の体系について、次のように述べている。

条件表現は、出来事を仮定的に予想しているのか、実際に起こった出来事について事実に述べるのかに分けられ、さらに予想される結果が起こる場合(順接)とそうでない場合(逆接)に分類でき、全体として、次のような体系を作る。

【表4】 蓮沼(2001)による条件表現の体系

	仮定的	事後的
順接	薬を飲めば頭痛が治る	薬を飲んだので頭痛が治った
逆接	薬を飲んでも頭痛が治らない	薬を飲んだのに頭痛が治らなかった

蓮沼の分類には、継起・条件づけの「スルト」と「シタラ」について言及されていないが、基本的な条件づけ形式について言えば、両者の分類は同様である。

### 1.1.2 中国語の「主従複文」の分類

中国語の「主従複文」には“因果句”<sup>4)</sup>、“条件句”<sup>5)</sup>、“転折句”<sup>6)</sup>、“譲歩句”<sup>7)</sup>の4種類がある。大河内(1967)<sup>8)</sup>は、これらの「主従複文」と「已然表現」、「未然表現」との関係について、以下のように分析している。

【表5】 「主従複文」と「已然表現」、「未然表現」との関係

	I	
II	已然表現	未然表現
順接関係	因果句	条件句
逆接関係	転折句	譲歩句

偏正複句<sup>9)</sup>の従句(従属節)はそれぞれ2つの条件で規制されている。Iは従句と主句(主節)の一般関係として、それが順接であるか逆接であるかということ。IIは従句の内容が已然であるか未然であるかということである。(中略) 已然表現とは、従句の表現内容がすでに行われたもの、すでにあったものというばかりでなく、たとえ行われていなくても行われることが明確に実証されているものを含む。同様に未然表現というのも、行為、行動として未然であるばかりでなく、その行われることが未実証、未確認であることを含む。

鄭亨奎(1992)<sup>10)</sup>は、大河内の分類を大枠として受け継いで、日本語の条件文と中国語の「主従複文」の枠組み、または相互の順接接続形式の対応について【表6】【表7】のように示している。

【表6】日本語の条件文と中国語の「主従複文」の枠組みの対応

	未然表現	已然表現
順接 関係	順接の仮定条件文(日)	順接の確定条件文(日)
	条件句(中)	因果句(中)
逆接 関係	逆接の仮定条件文(日)	逆接の確定条件文(日)
	譲歩句(中)	転折句(中)

【表7】順接関係の接続形式

	未然表現(仮定)	已然表現(確定)
日本語	ト、バ、タラ、ナラ	カラ、ノデ
中国語	如果…就, 要是…就	因为…所以

大河内(1967)と鄭(1992)によると、日本語の「条件文」と中国語の「主従複文」はほぼ重なっていることがわかる。

日本語の「条件文」の分類に関する先行記述と中国語の「主従複文」についての分類および両者の枠組みの対応に関する先行記述を通して、日本語の原因・理由を表す複文は、日本語の条件文において「順接確定条件文」と位置づけられ、中国語の因果関係を表す複文は、中国語の「主従複文」において「因果句」と位置づけられていることも明らかになった。よって、日本語の原因・理由を表す複文の「順接確定条件文」は中国語の「因果句」に対応していると規定できる。

## 1.2 日本語の因果関係を表す接続表現に関する従来の研究

1.1では日本語の「条件文」と中国語の「主従複文」の分類、枠組みおよび両言語における因果関係を表す複文の位置づけについて見てきた。本節では、日本語の原因・理由を表す接続表現に関する従来の研究を整理し、概観する。日本語の因果関係を表す複文においては多様な表現があるが、本論文では基本的な表現形式の「から」「ので」「ため(に)」「て」を含むもののみを扱うので、本節では主に「から」、「ので」、「ため(に)」、「て」に関する論述を取り上げることにする。因果関係を表す接続表現に関する従来の研究においては、「から」と「ので」を巡って、多くの議論がなされてきたが、「から・ので」と「ため(に)」、「て」の使い分けについて、構文的な側面から研究している論文は極めて少ない。

先行研究を整理するにあたって、まず、「から」と「ので」の相違を巡って論述されたものを取り上げる。そして、「から・ので」と「ため(に)」との構文的な相違について記述されたものを提示する。最後に「て」に関する先行研究を取り上げる。

### 1.2.1 「から」と「ので」の相違に関する従来の研究

永野（1952）<sup>11)</sup>をはじめ、半世紀に渡って「から」と「ので」の違いを巡って議論されてきたが、最も争点になっているのは、モダリティ形式と共起するか否かという問題である。永野（1952）では、「から」と「ので」の意味用法の基本的な違いを分析した上で、両者の意味の違いをめぐるニュアンスの種々の相違についても検討している。永野は「から」と「ので」の意味の違いについて考察する際に、「ので」に置き換えられない「から」の用例として、後件に来る文のタイプに注目し、以下のようなものを挙げている。（用例番号は本研究の番号順によるものである。）

① 推量（想像・推量）

(1) あいつのことだから、少しは持って帰るだろう。

② 見解（意見・主張）

(2) 黒舟之儀は商売のことであるから、年月を経て貿易に来べきである。

③ 意志（意向・決心）

(3) 朋子が可哀相だから慰めて上げよう。

④ 命令（禁止）

(4) 配給をやるから取りにこい。

⑤ 依頼（懇願・勧誘）

(5) 今夜おいしいシチューを作るから牛乳頂戴よ。

⑥ 質問

(6) しかし増井さんは帰られてもいつもは一人だからそんな必要を感じないでせう？

永野は、後件に来るこれらの文はすべて話し手の主観に基づく表現だとしている。「ので」文の特徴についても、後件に来る文に注目して、「ので」文の後件はほとんど客観的な叙述だとして、以下の用例を挙げている。

① 自然現象・物理的現象などの記述

(7) 山に近いので昼間はひどく暑いが、

② 社会事象の記述

(8) ドイツの実例ではこの最低水準が炭坑夫に保証されなかったので出炭高が低下した。

③ 生理的現象の描写

(9) さんざんはしたので、はらがぺこぺこだ。

④ 心の動き（感情・感覚を含む）の客観描写

(10) あんなに元気だった正広君が、車からおりた途端に急におとなしくなったしまったので僕はオヤッと思った。

⑤ 行動の客観描写

(11) 夜が明けたので私は船べりの方に寄って昨日いた家を見ました。

⑥ 事物の様子描写

(12) 快晴に恵まれたので下界をよく見下ろすことができる。

永野は「ので」文においては、話し手の主観的な要素を交えずに、客観的に描写されているとしている。そして、「ので」には拡張的な用法があり、丁寧形の依頼表現や意向表現があとにくる場合、「から」とあるべきところに「ので」の使われることが非常に多いことも主張している。結論としては永野は『から』は、表現者が前件を後件の原因・理由として主観的に措定して結び付ける言い方であり、『ので』は前件と後件とが原因・結果、理由・帰結の関係にあることが、話し手の主観を越えて存在する場合、その事態における因果関係をありのままに、主観を交えずに描写する言い方である。」と述べている。

永野の主観・客観論に対して、「から」にも客観的な用法があり、「ので」にも主観的な用法があるといった反論が出されているが、それ以来の研究を見れば、「ので」を客観的表現、「から」を主観的表現であるとする結論は不変的事実になっているようである。今日になると、「から」と「ので」についての研究は極めて多いが、その中でも永野説が最も有力視されていると言える。永野（1952）以後の研究では、永野の主観・客観論についての異論もあるが、それに完全に取って代るものはまだ書かれていない。

森田（1980）<sup>12)</sup>では「から」と「ので」の意味用法について分析した上、両者の相違についても記述した。森田は大枠として永野説を受け継ぎ、結論としては、「から」は主観的であり、後続句はモダリティ形式である場合は「から」を用いなければならず、「ので」は

話し手の主観以前にすでに存在する因果関係で、その全体をひとつの事態として客観的に把握し叙述する形式であると主張している。

奥津（1985）<sup>13)</sup>では、「ので」と「から」は、いずれも原因・結果の関係を表しているが、ふたつのつきそい・あわせ文のあいだには、意味的にも、構造的にも、するどい対立がみられると指摘し、「ので」と「から」の違いに関して次のように記述している。

原因的なつきそい・あわせ文が「するので」のかたちをとるばあい、つきそい文も・いいおわり文も、はなし手である《私》の意識のそとで進行しているリアルな出来事をえがきだしている。と同時に、これらのふたつの出来事のあいだのリアルな原因・結果の関係が、いいあらわされている。つまり、ふたつの出来事と、そのあいだにある原因・結果の関係がまるごとはなし手の《私》によってこの種のつきそい・あわせ文のなかに確認される。つまり、ここにえがきだされている原因・結果の関係は、つきそい文やいいおわり文にさしだされる出来事とおなじように、《私》にとっては、客観的であり、《私》はその関係のなかにいささかもはいるこんでいない。

これに対して、「するから」のかたちをとるばあいは、この原因・結果の関係は、はなし手である《私》が設定するというすがたをとってあらわれてくる。その意味では主体的である。ここでは、つきそい文はリアルな出来事をさしだしているとしても、いいおわり文は《私》の意欲とか決心とか意志とか期待とか命令とかのような、積極的な態度を表現していて、これらのふたつの文のあいだには、《私》の積極的な態度とそれを動機づける出来事との関係がさしだしている。

奥津(1985)の論述では、「ので」は客観的であり、「から」は主観的であるというような見解をはっきり述べていないが、実際は前述した永野と森田の客観論、主観論とよく似ている考え方だと思われる。

これらに対して、永野の主観・客観論を巡る反論も続出した。山田（1984）<sup>14)</sup>では、永野説の「「から」は表現者の主観的措定、「ので」は主観を越えた描写」に対する疑問を呈している。山田は、時代による推移もあるかもしれないが、少なくとも現在は、「ので」の下にも、推量や依頼などを含む文を置くことも可能だと考えたほうが自然であり、また、永野の論文に関して再検討の必要があると提言した。山田は永野説の例文の疑問点を指摘した上で、「ので」にも多く主観的な表現が見られるとして以下のような例を示している。

(13) 年賀に行きたいのだが、ああいうわけがある<sup>ので</sup>遠慮をする、… (意志)

(14) その店から斜かいにこちらが見える<sup>ので</sup>、幸太が話しに来るのをいつも見ていたに  
違いない。 (推量)

また、趙 (1988) <sup>15)</sup> は、永野説に対して、問題点を指摘した上で、以下のような反論を唱えている。

「から」は相手もよく知っている明らかな、また明らかと思われる、すなわち相手に追体験しやすい原因・理由を述べる時に用いられる。「ので」は相手の対象に対する原因理由の認識が低いと話し手が判断する時に使われる。両者とも、話し手の主観的気持が含まれているけれども、連用中止形によってしめくられる「ので」は形式にひきずられ、多少の制限が加えられている。

趙(1988)は、山田 (1988) と同じ疑問点を提示した。つまり、「後件に推量・命令・依頼・質問の表現が来るとき、本当に「ので」は不適格になるのか」という問題である。趙の反論では、「ので」は事柄への聞き手の認識が低い時、「から」は既知であるか追体験しやすい時に使用するとされているが、その理由については不明確な点や納得できない点も多く見られるという。

様々な反論が出されているが、永野の論説と同じ観点を持つ有力な説もある。南 (1993) <sup>16)</sup> では、構文論的に「から」と「ので」を取り上げて分析し、「ので」従属節が主節の判断段階に関係するもの、「から」従属節が主節の提出段階に関係するもの、との両者の違いを主張し、文の階層から次のように説明している。

～ノデの句の構造は主文の判断段階の構造の一部となって、それ全体に確定の性格をもたらす。その結果、主文は意志や命令の表現にはなり得ない。それに対して、～カラの句の文は、それ自身がすでに判断段階の処理を経た構造になっているので、主文の判断段階の一部になることができない。従って、主文の判断段階の構造に影響を及ぼさない。～カラそれ自身は確定の特性を持っていても、主文の意志あるいは命令の表現との共起が可能である (ように見える) のは、そのためである。

南は新しい視点から「から」と「ので」について分析しているが、前述した永野説及び森田説との共通点があることがわかる。「ので」については、主文が意志や命令の表現にはなり得ないこと、「から」が主文の意志あるいは命令表現との共起が可能であるという点は、永野（1952）、森田（1980）、南（1993）の三つの説の接点だと言える。

上記の諸説を見ると、「から」と「ので」に関する議論の展開は、ほとんど表現の主観・客観が主節のモダリティ形式の使用に規定されるという前提が立てられていることがわかる。

永野（1952）以後の研究では、永野の「から」は主観的な接続機能を、「ので」は客観的な接続機能を持つという論説に対して、森田（1980）はそれを大枠として受け継ぎ、南（1993）もそれと共通している点があるようである。

一方、山田（1986）、趙順文（1988）他は主観・客観論に疑問を提示し、「から」にも客観的な接続機能があり、「ので」にも主観的な接続機能があると反論している。「から」と「ので」に関する論説は前述したもの以外にも多くあるが、全体を通して「文末のモダリティ形式以外の構文要素への考慮が足りないように思われる。

以上、「から」と「ので」に関する従来研究からいくつか有力な説を選んで、概観してきた。次に「ため(に)」と「から」、「ので」の相違に関する先行研究を見る。

### 1.2.2 「ため(に)」と「から、ので」との相違に関する先行研究

「ため(に)」と「から、ので」との意味的な相違、構文上の相違および使い分けに関する研究は極めて少ない。これは、「から」と「ので」に関してモダリティ形式との関わりに注目しすぎたことに起因していると考えられる。また、因果関係を表す複文において、「から」と「ので」がもっとも多用されることとも関係があると思われる。「ため(に)」と「から」「ので」の相違に関する有力な説としてまず今尾（1991）が挙げられる。

今尾（1991）<sup>17)</sup>は「カラ、ノデ、タメ」の前接関係と後続関係を発話態度の観点から考察し、従属節とモダリティの共起関係を下表のように示している。

【表8】 接続表現とモダリティとの共起関係

モダリティ形式		カラ	ノデ	タメ
疑似形式	タイ	○	○	×
	ソウダ、ヨウダ、ラシイ（推量）	○	○	×
	ソウダ、トイウ（伝聞）	○	○	×
真正形式	ソウダ、トイウ（伝聞）	○	×	×
	マイ	○	×	×

今尾は「ため」、「から」、「ので」は主節のモダリティ形式との共起関係について、【表8】で示したように、意志、推量、伝聞表現が後続する場合には、「から」と「ので」は使用できるが、「ため」は使用できないと指摘している。また、発話態度の角度から前節関係および後続関係を考察し、以下のように記述している。

「カラ」…主観的要素にも客観的要素にも使用可能な接続形式

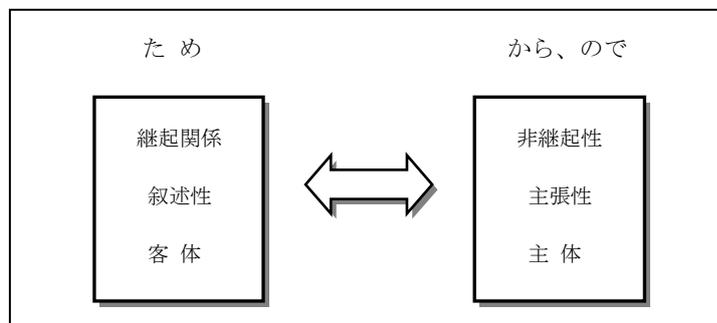
「ノデ」…客観的要素が含まれていれば使用可能な疑似客観的接続形式

「タメ」…主観的要素が含まれると使用不可能な客観的接続形式

今尾の結論からすると、「ため」の用法は一番狭く、客観的な意味しか表せないのに対して、「から」の用法は最も広く、主観的な意味だけでなく客観的な意味も表せ、その中間に「ので」が置かれている分類であるように思われる。今尾の説は、「から、ので、ため」の選択条件の考察に重点が置かれており、三者の意味や用法の相違を明確に示していないように思われる。

また、于（2000）<sup>18)</sup>では、「ため（に）」文と「から」文、「ので」文との相違について、先行研究を踏まえながら、検討が行われている。于（2000）は、「タメニ」文の主節に話者の心的態度を表す形やモダリティ形式を用いることができないという違いが依然として存在しているため、「ノデ、カラ」文との間に、継起性と非継起性、表現の叙述性と主張性という対立が機能していると考え。また、同じ動作動詞の「タ」形を用いるときは、継起性に基づく「タメニ」文では、動作の結果が原因になることを表し、非継起性の「ノデ、カラ」文では、過去の出来事を理由にすることを表している。両者の間には客体的表現と主体的表現の違いが感じられることになろう。」と述べている。

于によれば、「ため」と「から、ので」との対立的な相違は【図3】のように示すことができる。



【図3】「ため」と「から、ので」との対立的な相違

于は「ため（に）」文、「から、ので」文とテンスやモダリティ形式との関わりの相違などについて検討を行い、より深く、広く解析したものだと言えるが、抽象的で、理解しにくいところもあり、根拠はまだ不十分だと感じられる。したがって、「ため（に）」の用法や特徴またはそれと「から、ので」との相違については、更なる検討が必要であろう。

### 1.2.3 「て」と「から、ので、ため(に)」との相違に関する先行研究

1.2.1と1.2.2では、「から」と「ので」の相違と「ため（に）」と「から、ので」の相違に関する先行研究を概観してきたが、ここでは、原因と理由を表す「て」の意味機能または使用条件に関するものと、それが前三者との相違について論じられているものを見てみたい。

「て」に関する先行研究は前述した「ため」と同じように、あまり研究されていないが、それに関する論説はいくつか挙げられる。

寺村（1981）<sup>19)</sup>は、「て」形自体に「理由」の意味があるのではなく、前件・後件の意味関係からそのように解釈できる場合があるということにすぎない。したがって、「頭が痛くて学校を休もう」はおかしく、理由をあらわすのなら、「頭が痛いから学校を休もう」としなければならないと指摘している。

寺村によれば、「て」形自身には因果関係を表す機能がないため、「て」文の因果関係を読み取る時に、「て」によるのではなく、従属節と主節の内容から意味を読み取るということになる。

森田（2002）<sup>20)</sup>では、「～て」による条件的展開の基本発想について、次のように論じられている。

「～て」による条件的展開の基本発想とは、“前件の場面において、己の外で生ずる事象を、己側がいかに関与し受け止め認識把握したかの問題で、いわば融合型の表現である。したがって、対立型の、相手へ向けた自身の内側からの意志表明・心の志向は、原因・理由の「～て」の後件の発想としては不適格である。命令・依頼・懇願・禁止・勧め・希望などは、いずれも相手へ向けた意志的働きかけ表現であるから、「～て」による結果説明文脈の発想に外れる。このような思考内容には「～から」の確定順接の発想がぴったりだ。

森田（2002）によれば、「～て」を用いる時に、文末制約を受けやすく、主節のモダリティ形式と共起できないということがわかる。

「て」と「から、ので」との相違に関するものは、望月（1990）と仁田（1995）が挙げられる。望月（1990）<sup>21)</sup>では、「して」と「から」との使い分けを分析し、「から」には「動作の理由」を表すものと、「判断の根拠」を表すものの2種類の用法がある。これに対して、「て」には「判断の根拠」の使用方法がないと結論付けている。つまり、望月も「て」は文末の制限を受けやすいため、モダリティ形式と共起できる方法がないと言っている。

仁田（1995）<sup>22)</sup>では「して」と「ので」の使い分けについて分析し、以下の2点の違いが取り上げられている。（用例番号は本研究の番号順によるものである。）

- a. 従属節、主節ともに自己制御性の高い事象の場合、「ので」は用いられるが、「して」は用いられない。たとえば、
  - (15) 水着を買ったので、来週海に泳ぎに行く。
    - \* 水着を買って、来週海に泳ぎに行く。（原因・理由の解釈にならない）
- b. 従属節事象が主節事象より後に起こる場合、「ので」は用いられるが「して」は用いられない。たとえば、
  - (16) 明日友人が訪ねてくるので、部屋を掃除した。
    - \* 明日友人が訪ねてきて、部屋を掃除した。

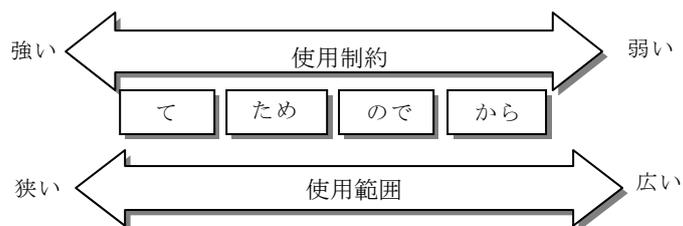
仁田の分析によれば、原因・理由を表す「して」の使用条件は、「ので」より制約を受け

やすく、モダリティ形式だけではなく、テンスの制約も受けるということがわかる。よって、「て」の使用範囲は「ので」より狭いということが考えられる。

また、于(2000)<sup>23)</sup>では、「て」文、「ため(に)」文、「から」文、「ので」文の4種類文について述べられている。于(2000)では「て」と「ために」を継起性を表すものとし、「から」と「ので」を継起性が含まれていない因果関係を表すものとして、以下のような結論が出されている。

継起性に特徴づけられる「シテ、タメニ」文は、従属節と主節を内容的に分断することが許されないため、表現内容全体が一まとまりをなして確定的な出来事間の因果関係を述べ立てることが多く、叙事的な表現になりやすい。それに対して、非継起性の「ノデ、カラ」文は、従属節と主節のテンス関係を、相対的テンスでも絶対的テンスでも、規定することができるので、二つの出来事が分断された関係にある。特に、絶対的テンスのときには、従属節では、未来の出来事を理由にすることができるばかりでなく、話者の判断や未来指向の話者の心的態度の表出を理由にすることもできる。

以上、「て」の意味機能、「て」と「から、ので、ため(に)」との相違に関する先行研究を取り上げた。それらを通して、原因を表す「て」の使用条件は他の表現より厳しく制限されていることがわかる。1.2.1と1.2.2で整理された内容と本節でまとめた結果を合わせてみると、「て」、「ため(に)」、「から」、「ので」の使用範囲の違いが明らかである。つまり、制約を受けやすければ受けやすいほど、使用条件が厳しくなり、使用範囲も狭くなる。一方、制約を受けにくければ受けにくいほど、使用条件が緩やかになり、使用範囲も広くなるという結論が得られる。これらに対して、使用条件の厳しさと使用範囲の広さの2つの側面からみれば、「から」、「ので」、「ため(に)」、「て」はそれぞれの位置づけが決まってくる。これを図で示すと、以下のようなになる。



【図4】 接続表現の使用制約と使用範囲との関係

### 1.3 中国語の「因果複文」に関する従来の研究

本節では、まず「因果複文」<sup>24)</sup>の分類および特徴についての主な先行研究の論述をまとめて取り上げる。次に、現在の「因果複文」に関する代表的な観点を提示する。さらに、**接続表現**の範囲、複文の「標識分類」などについても言及する。

#### 1.3.1 主要な先行研究における「因果複文」についての分類

呂叔湘（1952）<sup>25)</sup>では、広義の因果関係には「仮定句」、「推論句」、「因果句」の3種類が含まれていると主張した上で、前後分句の虚实から三種類の複文形式を区別している。

用「要是」和「就」连系的假设句，用「既然」和「就」连系的推论句，用「因为」和「所以」连系的因果句（中略）所表示的是根本相同的一种关系：广义的因果关系，包括客观的即事实的因果和主观的即事实的理由目的等等。这三种句法的同异，可以综括如下：

- ・ 假设句：若甲则乙，甲乙皆虚，理论的，一般的，泛论因果。
- ・ 推论句：既甲应乙，甲实乙虚，应用理论于实际，推断因果。
- ・ 因果句：因甲故乙，甲乙皆实，实际的，个案的，说明因果。

「要是」と「就」を用いて接続する仮定句や、「既然」と「就」を用いて接続する推論句、「因为」と「所以」を用いて接続する因果句は根本的に同じ関係を表している。すなわち、広義の因果関係であり、客観的な事実の原因結果や主観的な事実に至る理由、目的などを含んでいる。3種類の句の形式の異同は、以下のようにまとめられる。

- ・ 仮定句：甲であれば乙であり、甲と乙とも虚（仮定）である。理論的であり一般的であり、幅広く因果を論じる。
- ・ 推論句：甲が乙であるからには、甲は実（事実）であり、乙は虚（仮定）である。理論を実際に応用した推断的因果関係である。
- ・ 因果句：甲であるから、乙であり、甲乙ともに実（事実）である。個別的な因果説明である。（※ 本研究では、中国語の文献の訳は、すべて筆者によるものである）

ここで呂叔湘が述べている「虚と実」とは、実際には「未然表現と已然表現」のことを指していると思われる。

黎錦熙 (1957)<sup>26)</sup> では、「原因句」を主従複文の一種とし、「仮定句」と「譲歩句」などと並列している。「原因句」にはいわゆる「目的句」を含む。その点で、呂叔湘の分類と異なっている。

凡表因果关系的复句，无论语气重在因或重在果，一律认表果的为主句，表因的为从句；也不论语气重在行为或重在目的，一律认为表行为的为主句，表目的的为从句：这从句统叫原因句——因为行为的目的就是动机，就是动的原因。

あらゆる因果関係を表す複文は、語気の重さが原因にあるか結果にあるかは関係なく、結果を表すのは等しく主節であり、原因を表すのも等しく従属節である。また、語気の重さは行為にあるか目的にあるかは関係なく、行為を表すのは等しく主節であり、目的を表すのは等しく従属節である。すなわち、目的を表す従属節をすべて原因句と呼ぶ。それは行為の目的が動機であり、行動の原因であるからである。

黎錦熙の分類では、推論関係を表す「推論句」を等立句の1種の「承接句」としている。たとえば、

(17) 方才范学台批我的卷子上也是这个话，可见会看文章的都是这个讲究，一丝也不得差。

先程、範先生に添削された答案にも同じことが書いてあることから、文章を見るのがうまい人はみんなこういうところを重んじて、少しもいい加減にできないのである。

张志公他 (1980)<sup>27)</sup> では「因果句」を2種類に分類している。一般因果関係の“因为A，所以B”と推論因果関係の“既然A，就B”である。両者には「有相同的地方，也有不同的地方。(共通点があれば、相違点もある。)」と指摘している。“因为A，所以B”の「B」は実際にそうなっていることを指す。それに反して、“既然A，就B”の「B」は「A」という原因から推測されたものであるので、「B」は事実になるか否かについてはまだわからない。また、「前边先说出结果，后边从而推出原因，也可用“既然A，就B”。(結果を先に述べて、それによって原因を出す場合にも“既然A，就B”を用いることが出来る。)」と示している。例えば、

(18) 他**既然**晌午就赶到，准是天亮**就**动身的。

彼は昼に着いた**から**、夜明けに出発したに違いない。

张志公の「一般因果」と「推論因果」という分類は、代表的なものだと言える。両者の違いについては、後件は已然表現であるか未然表現であるかという点であることが示され、“既然A，就B”には結果を根拠にして、原因を推断する用法もあることを指摘している。张志公の観点は吕叔湘の論説と近いものと思われる。

王力（1985）<sup>28)</sup>では、前述の説とは違った分類が示されている。「主従句（主従複文）」を7種類に分けているが、「因果句」と関係しているのは「原因式」、「理由式」の2つの形式のみである。具体的な例は以下の通りである。

(19) 你们**因**不知诗，**所以**见了这浅近的就爱。 （原因式）

あなたたちは詩を知らない**から**、このようなわかりやすい詩を読むと直ぐ好きになる。

(20) 我**既**应了你，自然快快的了结。 （理由式）

わたしが承知した**以上は**、当然早く解決する。

上述の3つの説には、現在の複文を研究する主要な理論背景として、ほぼあらゆる現代漢語複文研究における基本的な問題点が提示されている。次に、現在の「因果複文」に関するいくつかの代表的観点を整理していく。

### 1.3.2 現在の「因果複文」の研究における代表的な観点

現在の複文研究に関する代表的なものとして、まず《现代汉语》、《汉语复句研究》、《实用现代汉语语法》が挙げられる。

胡裕树（1989）<sup>29)</sup>では、张志公と同様に「因果関係」を2種類に分けているが、「説明因果」、「推論因果」と称している。

(21) **因为**今天进城要办的事情多，**所以**天刚亮他就出门了。

今日は町に行って済ませるべき用事が多い**から**、彼女は夜明けとともに出かけた。

(22) 他既然知道做错了, 就应该赶快纠正。

彼は間違ったと分かった以上、直ぐやり直すべきである。

胡裕樹はまた、“因为A, 所以B”の中のAとBの関係は切れ目がなく、それにすでに実現したことと、実証したことであると指摘し、呂叔湘の「甲であるから、乙であり、甲乙ともに実である。実際的な説明因果である。」と同じ観点が提示されている。

邢福义 (2001) <sup>30)</sup> では、「複文」に関して、大きな分類を行い、「複文」を「因果類複文」「並列類複文」「転折類複文」の3種類に大別している。「因果類複文」は広義の因果関係を表す複文の総称であり、“因果句、推断句、假设句、条件句、目的句”の5種類に分けられている。その中で本研究と関わっているのは“因果句”と“推断句”である。邢福义は“因果句”と“推断句”について以下のように定義している。

因果句——“说明性因果句”的简称。说明事物间的因果联系。作为代表性的形式标志，“因为……所以……”既是整个因果类复句的点标志，也是因果句的点标志。

(因果句——「说明性因果句」の略称である。事物の間の因果関係を説明している。代表的な形式接続表現としての“因为……所以……”はすべての因果類複文の重要な標識でもあれば、因果句の重要な標識でもある。)

推断句——“据实性因果推断句”的简称。以事实为根据推断事物间的联系。代表性形式标志是“既然……就……”。

(推断句——「事実に基づいた因果推断句」の略称である。事実を根拠をとし事物の間の関係を推断する。代表的な形式接続表現は“既然……就……”である。)

邢福义は、「因果類複文」を広義に分析しているが、「因果句」と「推断句」についての論述は、前述の呂叔湘、张志公、胡裕樹の論説と大きく重なっていることがわかる。

以上で取り上げた論説では、「因果複文」に関して、分類上では異なっている部分が見られるが、定義としては大同小異だと言える。「因果複文」の分類について、現在、「説明因果複文」と「推断因果複文」の2種類にはっきりと分けているものが多いようである。刘月华(1991)や赵恩芳(1998)などにおいて、中国語の「因果複文」を「説明因果複文」と「推断因果複文」に分けている。ここで、刘月华(1991) <sup>31)</sup> の分類と定義を以下に引用する。

「因果複文」は偏句が原因を表し、正句が結果を表すもの。因果複文はさらに「2種類に分けられる。

説明因果複文：この複文の偏句は原因を説明し、正句はそれによって生じた結果を説明する。常用の関連語句は“因为…，所以…”“由于”、“因而”、“因此”、“以致”などである。因果複文は二つの分句の両方に関連語句を用いてもよいし、一つの分句だけに用いてもよいし、まったく関連語句を用いなくてもよい。(中略)

推断因果複文：偏句(従属節)が原因・理由を表し、正句はそれに基づく推断を表す。常用の関連語句は“既然…，就…”である。

刘(1991)のように、「因果複文」を2種類に分類して、「説明因果複文」と「推断因果複文」と呼ぶのが主流になっているようである。

### 1.3.3 “关联词语”の範囲、複文の「標識分類」及び「意合複文」の定義

1.3.1と1.3.2では中国語の「因果複文」の分類や機能などの記述をまとめて見てきた。次に“关联词语”の範囲および中国語の複文の「標識分類」などについての新しい研究を参考にして、簡略に紹介しておきたい。

#### 1.3.3.1 “关联词语”の範囲

“关联词语”の範囲については、いくつかの研究著書にも言及されているが、詳細に記述しているものは邢福义(2001)《汉语复句研究》<sup>32)</sup>である。邢福义は“关联词语”の範囲を以下のように定義している。

复句关联词语是根据联结分句，表明相互关系，形成复句格式的共同特点组合拢来的一些词语，没有十分明确的标准，因而也没有十分明确的范围。大体说，有四种：

- 第一、句間連詞。它們通常連接分句，不充當句子成分。如“因為、所以、雖然、但是、不但、而且”等等。
- 第二、關聯副詞。它們一般既起關聯作用，又在句子里充當狀語。如“就、又、也、還”等等。
- 第三、助詞“的話”。這是一個表示假設語氣的助詞，總是用在假設分句末尾，標明分句與分句之間具有假設和結果的關係。
- 第四、超詞形式。它們本身已不是一個詞。(中略)如“就因為”“就是因為”“正由於”“正是由於”等關係詞語。

複文の“關聯詞語”とは分句を連接することによって、相互關係を表し、複文の形式で共通の特徴を形成することによって組み合わされた語句のことである。はっきりした基準がないため、明確な範囲も定められていないが、大体、以下の4種類である。

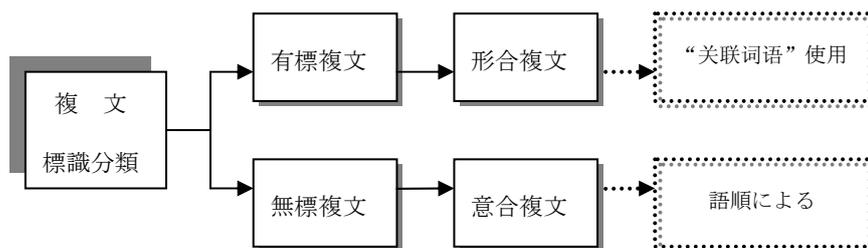
- 第一、句と句の間の“連詞”(接統詞)。普通は分句を連接するが、文の構成要素とはならない。たとえば、“因為、所以、雖然、但是、不但、而且”などである。
- 第二、“關聯副詞”。一般的には關連する機能も果たしており、また文中では連用修飾語にもなれる。たとえば、“就、又、也、還”などである。
- 第三、助詞の“的話”。これは假定語氣を表す助詞である。常に假定分句の末尾に現れ、分句と分句の間に假定と結果の關係があることを示す。
- 第四、語法單位を超えた形式。そのような接統表現は元來、單一の語ではない。(中略)たとえば、“就因為”“就是因為”“正由於”“正是由於”などの接統表現がそうである。

上記の記述を通して、品詞類においては、“關聯詞語”は固定的な類に属していないことがわかる。“關聯詞語”には“連詞(接統詞)”もあり、“關聯副詞(副詞の一種)”もある。また、他の種類の品詞もある。つまり“關聯詞語”には、“連詞”だけではなく、“副詞”または他の品詞も含まれている。よって、中国語では接統機能を持つものは単一ではなく、意味から見れば、広く日本語の「接統表現」に相当すると言える。

### 1.3.3.2 複文の「標識分類」及び「意合複文」の定義

中国語の複文には、分句と分句の組み合わせの語法手段が2種類ある。ひとつは語順に

よる組み合わせ方である。もうひとつは“关联词语”による組み合わせ方である。“关联词语”という標識を用いるか否かにより、複文は「無標複文」と「有標複文」の2種類に分けられる。多くの研究では、“关联词语”を用いるものを「形合句」あるいは「形合複文」と言い、“关联词语”を用いないものを「意合句」または「意合複文」と称している。これを図で示すと以下のようなになる。



【図5】中国語の複文の標識分類

また、「意合複文」に関して、赵恩芳(1998)<sup>33)</sup>において、次のように定義されている。

分句与分句组合时不借主关联词语的帮助，分句之间的语义关系和逻辑事理主要通过语序表现出来。这种组合方法叫做“直接组合法”，也叫“意合法”。用这种方法组合成的复句叫做“无标志复句”，也叫“意合复句”。

(分句と分句を組み合わせる際に、関連詞語の助けを借りずに、分句の間の語義関係や論理などについて主として語順を通じて表現する。このような組み合わせ方は「直接組み合わせ法」と呼ばれ、「意合法」とも呼ばれている。したがって、こうした方法で組み合わせられた複文は「無標識複文」と称され、「意合複文」とも言われている。)

「意合複文」とは、中国語でよくみられる形態であり、因果関係を表す複文において前後節をつなぐ表現が使用されない“P, Q”型のことである。

#### 1.4 本研究の位置づけ

1.2と1.3で、日本語の因果関係を表す「から・ので・ため(に)・て」に関する先行研究と、中国語の「因果複文」に関する先行研究や“关联词语”の範囲、複文の「標識分類」などについて概観してきた。「から」と「ので」について言えば、大きく二つの観点に分か

れている。一つ目は、「から」は主観的であり、「ので」は客観的であるということである。今一つは「から」にも客観的な要素があり、「ので」にも主観的な要素があるということである。「ため(に)」と「て」に関しては、文末のモダリティ表現と共起できない点からみれば、純粋に客観的な表現だと認められる。先行研究を概観してみると、「から」と「ので」、「ため(に)」、「て」に含まれている客観的な要素の度合いは以下のように図示できるであろう。



【図6】接続表現の客観的な要素の度合い

一方、中国語では「因果複文」に関する分類などに相違が見られるものの、その基本的な立場はほとんど同じである。中国語の「因果複文」には「説明因果複文」と「推論因果複文」の2種類があるとする説が主流になっている。それらの相違点は、主として已然であるか未然であるかという点にあるものが圧倒的に多い。

総じて言えば、中国語の「因果複文」についての分析は、已然表現か未然表現かに注目しているように思われる。これは、先行研究から見られた両言語のひとつの相違点だと言える。つまり、日本語の接続表現が、モダリティ形式と共起するか否かに注目しているのに対して、中国語の接続表現はモダリティ形式と共起するか否かに関係なく、已然であるか否かを重視しているということである。すなわち、接続表現を用いる際に、従属節と主節がともに事実になっている確定表現であるか、それとも従属節は事実で主節はまだ未確定の段階かなどというようなことと関わっているのである。

両言語における、もうひとつの大きな相違点は、「標識（節と節をつなぐ表現）」を有するか否かにある。つまり、中国語の複文では接続表現を用いず、意念で相互を結び付けて構成された「意合複文」が存在するというのである。

1.2で「から・ので・ため(に)・て」に関する従来研究を整理したが、「から・ので・ため(に)・て」に関する研究には、それぞれの意味用法などに関しては明確にされていない部分がまだ残っているように思われる。これらをめぐって、まだ疑問点が残っているのが現状である。したがって、本研究では日本語の因果関係を表す代表的な「から・ので・ため・て」文を選び、中国語表現と比較対照を行う。なお、本研究の主な目的は、「から・ので・ため(に)・て」の相互の使い分けや意味機能の相違を見極めるのではなく、日中両言

語の因果関係を表す接続表現における対照研究をすすめることにある。対照分析の結果によって、両言語の重なりとずれを記述すると同時に、それぞれの特徴を明らかにする。最後に、対照研究を通して得られた結果を有効に日本語教育現場に応用する方法について考え、日本語の因果関係を表す接続表現における、より効果的な教授方法を考案する。

## 注

### 第1章

- 1) 中国語では「偏正複句」という。1つの複文中に2つの分句があり、そのうちの一分句が他方の分句を修飾、限定している。刘月华他(1991:732)による。
- 2) 仁田(1987:17)「条件づけとその周辺」『日本語学』6
- 3) 蓮沼昭子他(2001:vii)冒頭部分を参照されたい。
- 4) “因果句”とは、偏句が原因を表し、正句が結果を表すもの。
- 5) “条件句”とは、偏句が条件を表し、正句が結果を表す。
- 6) “転折句”とは、偏句がある事実を叙述し、正句にはこの事実在即して得られる誰もが納得するような結論は述べられず、むしろそれとは反対の事実または部分的に反対の事実を述べる。
- 7) “譲歩句”とは、偏句で、ある事実を認めて譲歩し、正句が反対の角度から逆の意味を述べる。
- 8) 詳しくは大河内(1967:5)を参照されたい。
- 9) 注<sup>1)</sup>に同じ。
- 10) 詳しくは鄭亨奎(1992:115)を参照されたい。
- 11) 永野(1952:33-37)「「から」と「ので」とはどう違うか」『国語と国文学』2月号。
- 12) 森田(1980:347-350)『基礎日本語辞典』角川書店。
- 13) 奥津(1985:27)「条件づけを表現するつきそい・あわせ文(二)——その2・原因的なつきそい・あわせ文——」『教育国語』82
- 14) 山田(1984:209-210)「「ので」と「から」の問題点」『研究資料日本文法5』明治書院。
- 15) 趙(1988:74)「「から」と「ので」——永野説解釈する——」『日本語学』7-7。
- 16) 南(1993:232-233)『現代日本語文法の輪郭』大修館書店。
- 17) 今尾(1991:80-81)「カラ、ノデ、タメーその選択制限をめぐって」『日本語学』10-12。
- 18) 于(2000:163)《現代日語中原因、理由、目的句相关性的研究》世界知識出版社。
- 19) 寺村(1981:36)『日本語の文法(下)』国立国語研究所。
- 20) 森田(2002:299-300)『日本語文法の発想』ひつじ書房。
- 21) 望月(1990:46-47)「条件づけをめぐって——「理由」の「シテ」と「カラ」——」『日本学報』9  
大阪大学。
- 22) 仁田(1995)「シテ形接続をめぐって」『複文の研究(上)』くろしお出版。

- 23) 詳しくは于 (2000 : 162-163) 参照。
- 24) 「因果複文」偏句は原因を説明し、正句はそれによって生じた結果を説明する。刘月华他(1991:732)による。
- 25) 吕叔湘 (1952 : 427) 《中国语法要略》商务印书馆。
- 26) 詳しくは黎锦熙(1957 : 207-215) 《新著国语法》商务印书馆 参照。
- 27) 詳しくは张志公(1980 : 216-226) 《汉语知识》人民教育出版社 参照。
- 28) 詳しくは王力(1985:59-64) 《中国现代语法》商务印书馆 参照。
- 29) 詳しくは胡裕树(1989:406-410) 《现代汉语》上海人民出版社 参照。
- 30) 邢福义(2001:39-40) 《汉语复句研究》商务印书馆。
- 31) 刘月华(1991:732-733) 『現代中国語文法総覧 (下)』 くろしお出版。
- 32) 邢福义 (2001:28) 《汉语复句研究》商务印书馆。
- 33) 赵恩芳他(1998:66) 《现代汉语复句研究》 山东教育出版社。